随想　日々の想い　ずいそう

向き合っていく心を

夏休みが近づくと、思い出す男の子がいる。時々乱暴な言葉を遣うこともあったが、「おいらの先生は、やさしいんだぞ」と、会う人たちに、いつも自慢げに話していたD夫である。

四月に、入園してきたD夫にとって、たくさんの遊具に囲まれ、好きな遊びができる幼稚園は、全てが新鮮であり、あのディズニーランドよりも楽しい所だった。そして、やさしい先生がいる幼稚園を大好きになるのに、時間はかからなかった。

クレヨンで、何枚も何枚も、そして何日もウルトラマンの絵を描き続けていた姿が忘れられない。

楽しい日々の中で、友達もたくさんできたが、年長組になると休みがちになり、一学期が終わるころには、ほとんど登園しなくなった。家庭の事情で登園できなくなったのだ。担任はもちろん、みんなが登園できるよう励まし続けた。しかし、若い母親は、周囲の人たちの心配を、「おせっかい」と言い、幼稚園をやめさせてしまった。親の都合でD夫は、大好きな幼稚園に来られなくなってしまったのだ。

このときの母親は深い悩みとストレスを抱えていたのではないか。私に、それを受け止め見守ってやれる心の余裕があったなら、D夫はまた違う生活が送れたかもしれない。幼稚園を辞めなかったかもしれない。友達と一緒に修了の日を迎えられたに違いない。あのときのことを思うと、自分のつたなさが悔やまれ、D夫にすまないと心が痛む。

いま、子供たちを取り巻く環境が、めまぐるしく変化している。D夫やD夫の母親との出会いをとおして、様々な問題を抱えた子供たちや親たち一人一人に、ていねいに向き合っていく大切さを、教えられ考えさせられた。

保育者が、すべての問題を解決できるものではない。しかし、「人間は、人情を食べて生きる動物」と言われているのだから、子供たちや親たちに心を砕いて接していけば、必ず心に響くはずだと信じている。それには、私自身が人との出会いから学んだことを生かしていく努力が必要なのだと強く思っている。

D夫の顔や声をいつまでも忘れまいと思う。

大銀杏の村から

三次　徹

村のシンボルである大銀杏。樹齢八百年のこの大樹が芽吹き、若葉の輝きを放つ頃、新採用教員として伊南小学校の教壇に立った。

採用になるまでの私の道程は決して平坦ではなく、さまざまな経験をした遠回りの道だった。高校の講師や小学校の産休補充教員、また、一般企業での会社員、農家でのアルバイトなど、職業は多種・多岐にわたった。